

## 「太宰府ゆかりの文学講座 2」



爽やかな秋の訪れを感じる頃となりました。

ご好評につき、今年も太宰府ゆかりの日本文学作品を読む公開講座を開催いたします。四王寺山や宝満山が目の前に広がる明るいキャンパスで、楽しく学びませんか。皆さまのお越しを心よりお待ちしております。

10/19(木) 13:00~14:30

紫式部と筑紫の五節—『源氏物語』人物造型の秘密—

文化教養学科 特任教授 高橋 敬一

11/16(木) 13:00~14:30

吉井<sup>うたあんぎゃ</sup>勇の歌行脚と太宰府

文化教養学科 准教授 桐生 直代

12/7(木) 13:00~14:30

『万葉集』をよむ—文字とことば—

文化教養学科 講師 藤田 優子

【開催場所】 福岡女子短期大学キャンパス

【受講料】 無料

【申し込み】 左のQRコードからお申し込みください。



または、ハガキ、Fax、E-mail、本学ホームページ掲載の申込用紙、いずれからでもお申し込みできます。ハガキ、Fax、E-mailの方は、お名前・ご住所・お電話番号・受講希望日・講座名をご記入ください。

〒818-0193

太宰府市五条四丁目 16-1 福岡女子短期大学庶務課

電話:092-922-4034/Fax:092-922-6453/E-mail:[kouza34@fukuoka-wjc.ac.jp](mailto:kouza34@fukuoka-wjc.ac.jp)

ホームページ:<https://www.fukuoka-wjc.ac.jp/>

## 太宰府ゆかりの文学講座 2



## 紫式部と筑紫の五節—『源氏物語』人物造型の秘密—（高橋 敬一）

『源氏物語』には、太宰府と縁のある女性が二人登場します。筑紫の五節と玉鬘です。筑紫の五節は、父の太宰府赴任に伴って下向していたが、任期を終えた父とともに上京する途中、須磨で光源氏と文（和歌）を交わすも、直接会うことはなく終わり、その後もしばしば五節の行事があるたびに思い出す、光源氏にとっては「昔の女」として描かれています。玉鬘は、乳母一家に伴われて、4歳の時、太宰府へ下って、この地で20歳まで成長した女性です。今回の講座では、筑紫の五節のモデルとされる女性について、紫式部の自撰歌集とされる『紫式部集』を読み解きながら考えます。

吉井勇の<sup>うたあんぎゃ</sup>歌行脚と太宰府（桐生 直代）

「いのち短し、恋せよ、<sup>おとめ</sup>少女」（「ゴンドラの唄」）——どこかで一度は耳にしたことがあるのではないのでしょうか。この詩の作者・吉井勇は、その生まれから「伯爵歌人」と呼ばれ、耽美頹唐な歌風で一世を風靡します。しかし、家庭は破綻し、苦悩の中で隠遁と漂泊の日々を送ります。昭和11年（1936）、「歌行脚」と称する旅の中で、ここ太宰府を訪れます。後に吉井はこの旅を振り返り、万葉人に思いを馳せ、「旅の愁い」を慰めた梅ヶ枝餅や、ポケットにしのはせた飛梅の実をうたいます。この講座では、吉井の人生や来訪時の交友関係なども踏まえ、彼の短歌から立ち上がる太宰府の風景と思いを読んでいます。

## 『万葉集』をよむ—文字とことば—（藤田 優子）

『万葉集』をよんだことはありますか？ 現代において、和歌や文学作品に触れるということは、文字を読むということとほぼ同じと考える人が多いのではないのでしょうか。しかし、『万葉集』が成立したとされる約1300年前の日本には、日本語専用の文字は存在しませんでした。それでは、どのような方法によって万葉歌は現代にまで伝えられたのでしょうか。

この講座では、太宰府にゆかりのある万葉歌を取り上げながら、文字とことばの関係を考えていきます。